YAMATO Nature Circle

ヤマト自然倶楽部 —ヤマトネイチャーサークル— 2021/12 vol.123

「ヤマトネイチャーサークル」は、株式会社ヤマトが行なっている様々な自然環境への取り組みの総称です。
さらなる自然との共生を目指し、地域社会や自然環境への貢献を目的として「ヤマトネイチャーサークル」は幅広い情報を発信していきます。

葉画家 群馬直美の ヤマトビオトープ園の葉っぱたち vol.58

絵と文 群馬直美

極小の粒に《ハナショウブ》

7カ月ぶりのビオトープ園散歩。
果たして、葉っぱたちは私を迎え入れてくれるのだろうか…。
固唾を呑んで園内に踏み入ると、10月の陽光で木の葉がキラキラキラキラ。
…待ってたよ～ …どうしてた～ …久しぶりだね～ …元気そうだね～
そんなささやき声が方々から聞こえてくるよう。
葉っぱたちの変わらぬ姿に、心が湧き立つ。
いつものように、案内人の諏訪さんと木下さん、そして今日は上毛新聞の記者さんも一緒。
新刊『葉っぱ描命(かくめい)』(『ヤマトビオトープ園の葉っぱたち』の連載画文と
『下仁田ネギの一生』の連作画文をまとめた本)を片手に、「これがソシンロウバイの木。
2016年1月3日には、枯れ葉が落ちずにたくさん付いていて入院中の父へのエールと思い、
描いたけれど、今はこんなに青々とした葉を付けている。
ビオトープ園の葉っぱたちは、毎月違う表情で楽しませてくれる。去年と今年でも驚くほど違う」。
ぼろぼろのクリの枯れ葉を描き故郷の風景の豊かさに気づかされたこと、
拡大して描いたリンゴの花が思いのほか毛むくじゃらでびっくりしたことなど、
4年間の月一ビオトープ園散歩の日々が蘇ってくる。
今回は、池の辺りのハナショウブを描くことに。
「えっ、これが同じ植物の実?!」と疑わしくなるほど違う4つの実が、長く伸びた茎の先に付いている。
立川のアトリエで、原寸大でありのままに描く14日間——。
細かな付着物の描き込みに入ったとき、大切な親友の訃報が舞い込んだ。
16歳年下の若い友である。彼女は私の描く葉っぱの絵に「とてもいやされる」と言っていた。
葉裏に付いた極小の黒い付着物。
亡き友も私もこの大きな世界の中では見えるか見えないかの極小の粒…。
「これは、あなた」「これは、私」… 。
小さな黒い点々の一つ一つの形と色合いに目を凝らし、その個性を必死で描き分けようと試みる。
きちんと描かなくては。極小の粒に、友を思う。
菖蒲湯に束ねて浮かべるショウブの葉っぱは、今回描いたアヤメ科のハナショウブとは別物だそうだ。

表紙の絵 「ハナショウブの実」

天辺に居るのは人魚姫! 四者四様の実の表情。

・紙(ファブリアーノ エキストラホワイト極細目)/テンペラ
・size:410mm×320mm
・2021年11月3日完成
・ヤマトビオトープ園にて 10.21採集
© Naomi Gumma

建設プロダクト ヤマト

株式会社ヤマト 総務部広報室
2021年11月発行
〒371-0844 群馬県前橋市古市町118 TEL.027-290-1800(代) FAX.027-290-1896
ヤマトホームページ www.yamato-se.co.jp

群馬直美 GUMMA NAOMI プロフィール
高崎市生まれ。1982年、東京造形大学絵画科卒業。在学中に新緑の美しさ、その生命力に深く癒された経験から、"葉っぱ"をテーマとする創作活動に入る。「葉っぱの精神ーこの世の中の一つ一つのものは全て同じ価値があり光り輝く存在である」に則り、1991年テンペラで克明に描く現在の作風に至る。著書に『言の葉 葉っぱ暦』『群馬直美の木の葉と木の実の美術館』他。
東京都立川市在住。 https://www.wood.jp/konoha/